

---

# 機巧アリスに口付けを

水守秀一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機巧アリスに口付けを

### 【Nコード】

N9026X

### 【作者名】

水守秀一

### 【あらすじ】

Automatic Livingdoll Common (Custom) Edition。通称アリス。

高度な知性を備えた女性型アンドロイドの普及する21世紀末の東京。

彼女らの人格改修を生業とする男性、朝倉冬治は、ある日一人のアリスに出会う。

「先生、アリスが希うなど、馬鹿げているとは思われませんか？」

- Prologue (前書き)

タイトルが読みにくいので補足します。

「機巧アリス」は「からくりありす」と読みます。

## - Prologue

### - Prologue

あれはいつのことだったか。

錆色の空が重たい雨を吐き出し、小さな肩をしとどに濡らしていたことを覚えている。澄んだ大きな瞳が切なそうに震え、冷たい雨と交じり合った涙が白い頬をそつと伝っては、制服の襟に染みをつくっていた。

もう会えないわけじゃない。永劫の別れとはとても呼べない。ありふれた、つまらない別離に過ぎないはずだった。だけどその涙が、悲しげに遷ろうその瞳が、二度とはこない再開の時を余りにも強く予感させていた。

たった一人の家族だった。互いに父は無し。オレの母の行方は知れず、彼女の母は、何年も前に異国で凶弾に倒れたと聞く。血の縁はなく、何が共通したわけでもない。ただ幼いころより、それしかすぎるものがないかのように、また北に咲いた一輪の花が只管に雨のみを待ち続けるかのように、互いに身を寄せ合って生きてきた。

だから笑えなかった。幸せにつながる別れなら、微笑まねばならないと分かっていた。笑顔で、とびきりの明るい声で、送り出してやるべきだと知っていた。それでも。

「冬治……」

冷たく悴んだ手で俺の制服の袖をつかみ、彼女が呟く。雨と涙をためた瞼が刹那強く閉じられ、同時に指先にも力がこもる。

「絶対、絶対忘れないでね……」

遠慮がちに開かれた瞼の中で、ダークブラウンの瞳が揺らぐ。悲しみを湛えたそれは、苦痛に歪んでいるようにすら見えた。

「待ってなきゃやだよ？絶対待っててくれなきゃ、やだからね？」  
追い詰められた心が、透き通ったソプラノまでも蝕んでいく。喘ぎ

に似た眩きに、俺はただただ、何度も頷いてみせることで答えた。ほっそりとした体軀をそつと抱き寄せ、両の腕に力を込める。

「っ……っ」

辛うじて言葉を成していた彼女の声は、俺の胸に顔をうずめると同時に、水分を含んだ嗚咽へと変わった。

大丈夫。お前の気持ち、ちゃんと届いてるから。絶対に忘れないから。ずっと待つてるから。

口を開けば叫んでしまいそうで、ただ彼女を困らせるだけの台詞を、何度も叫んでしまいそうで。

胸の中で、彼女の問いかけへの答えを幾度も眩きながら、俺は天を仰ぎ見る。

また会おう、必ず。そうしたら、そうしたらその時は。

頭の奥に、胸の奥に、彼女の弱々しい嗚咽が、いつまでも響き続ける。愛する人の奏でる、悲哀の音色。俺の記憶にある、彼女の最期の音色。

彼女は、戻ってこなかった。

## - Chapter . 1 アリサ 【1】

- Chapter . 1 アリサ

「T3200、聞こえるか？」

少女がゆっくりと瞳を開く。その様を確認し、俺は胸に抱えた小型端末に電子ペンを走らせる。SystemAllGreen。ベツド脇に腰掛けて上体を軽くひねり、寝そべる少女の額に手を当てる。そのまま首筋に指先を滑らせ、脈拍を確認した。

「OKだ。T3200、起き上がってみてくれ」

体温調節機能及び脈動、触診上も問題なし。小さな掌を軽く握り、少女に身を起こさせる。数秒の沈黙。突如はつとしたように大きな瞳を見開くと、少女は俺の手を乱暴に振り払った。

「き、気安く触らないでよっ。このヤブ医者っ」

甲高い声で叫ぶと、素早く身を引き細く端正な眉を吊り上げて俺をねめつける。僅かに上気した頬が、LEDランプに照らされて妙に輝いて見える。一つため息。だがこれでいい。

「気分はどうだ？」

端末をサイドテーブルにそっと置き、もう触れないよと両手を開いて見せてから、問いかける。鋭い眼光はそのままに、少女は呟くように答えた。

「いいわけではないでしょ……。あつちこつち触られたし……」

ようやくと俺から視線を外すと、不快感と羞恥心がぶり返したのか、少女は僅かに目を細めた。

「診察の一環なんだから、仕方ないだろ？それにもう終わったんだ。あんまり怒るな」

サイドテーブルの端末を再び手に取り、部屋の隅に設置されたデスクに移動する。引き出しから親指程の金属棒を取り出すと、先端を液晶画面に向けた。小さな駆動音と共に、金属棒に刻まれた1ミリ

程の溝が赤く明滅する。同時に小型端末の電源が落ちた。オートマティックシール。液晶画面のハードキャプチャを瞬間的に取得する道具だ。デスクに備え付けられている大型の液晶パネルと無線でリンクしているため、この操作で小型端末に入力した内容は全てデスクの本体に移されたことになる。今更だが、便利な世の中になったものだ。

「兎に角、どこか異常はないか確認したい。お前の感覚でいい。調子はどうか？」

デスクの上のプラスチックボトルを手に取り、差し出しながら尋ねる。ボトルを受け取り、軽く伸びをしてみせると、少女は頷いた。「問題ない」ととって良いようだ。

「ならいい。作業はこれで全部完了だ。お疲れ様」

ほっとしたせいか、直前のやり取りを一瞬忘れた。頭でも撫でてやるうと手を伸ばし、思い切り振り払われる。続いてボトルが飛んできた。

「触んなって言っつてんでしょっ」

寸でのところで身をひねって避けたボトルは壁にぶつかり、サイドチェアの上へ。置いてあった小型端末に少し、モニターのワンピースに盛大に、内容液をぶちまけた。

「……」

大きくため息。さすがにやりすぎたと思ったのか、少女も押し黙る。「寝てる。お前」

叱責の声に身構える少女にそう告げると、サイドチェアに向かって

## - Chapter 1 アリサ 【2】

アリサが眠ったのを確認し、自室に戻った。自室は職場と屋根を同じくする居住空間の一室で、先刻までアリサの罵詈雑言が響いていた研究室とは、廊下を一本隔てた真向かいにある。固めのソファに腰を沈めると、サイドテーブルに備え付けられたタッチパネルに指を滑らせた。広さにして8畳程の洋室の隅、簡素なキッチンからゴトゴトとミルの挽かれる音が響く。背もたれに完全に身を預けると、天を仰ぐようにしてゆっくりと目を閉じた。

Automatic Living Doll Common (Custom) Edition。通称アリス。10年ほど前に国内最大の精密機器ベンダーであるPhysical Illusion社から発売された女性型アンドロイドだ。15歳女性程度の思考能力と語彙力を有し、10歳女性程度の運動能力を備えている。極めて精緻な人格プログラムと体表を覆う人工皮膚の恩恵で、外貌と行動だけで見たのなら、人間の少女と僅かほどの違いもない。一体1250万円という高額な商品であるにもかかわらず、アリスは発売から僅か1年で100万体制を出荷。Physical Illusion社は発売年度の業績予想で、当初発表に比して経常利益270%増ともなる上方修正を最終的に迫られた。世紀末も近い近年、21世紀最大のヒット商品ともなる可能性を秘めているとして、全国的にアリスの販売強化キャンペーンが勢いを増している。

「子室に恵まれなかった夫婦の究極的な癒しとして、あるいは、永続的に稼働し続ける最強の家事手伝い、ベビーシッターとして」Physical Illusion社のアリス開発プロジェクトを特集したドキュメンタリー番組で、以前販売責任者がそのような発言をしていた。だが妄言だ。開発プロジェクトの定義段階でどれほどに清廉な目的があったかは知らないが、アリスの爆発的なヒットの理由は他にある。それはアリスの体躯の「ありとあらゆる部位」



が人間と同様の造りをもっているということだ。無論アンドロイドである以上、人間が感じる諸般の感覚は持ち合わせていない。痛みを感じることはなく、片腕が切断されようが平気で動き続ける。子を産むこともできず、涙を流すこともない。髪、睫、眉、陰毛を除いた体毛は元より生えておらず、一度抜けたものが再び生え揃うこともない。ただ、股関節付近に位置する例の部位は、極めて精巧に形作られている。出産という機能が存在せず、また排尿もしないにも関わらず、そのためのパーツは存在するのだ。それが何を意味するか等、言わずもなだろつ。

キッチンから良い匂いが漂ってきた。コーヒーが入ったらしい。サイドテーブルに再び手を伸ばし、パネルの右下の表示された「dish charge」のアイコンに触れる。キッチンに置かれた円筒状の無機質なコーヒーマーカーからカップにコーヒーを注ぐ音が聞こえ始めた。部屋隅のキッチンまで数歩歩くと、カップを取り、再びソファへ戻る。砂糖もミルクも必要ない。コーヒーマーカーは事前にプログラムしてあるオレの好みにそって、それらを既に投入してくれている。淹れたてのコーヒーの香りを楽しみながら、オレはふと、アリスの顔を思い出した。

勝気につり上がった細い眉。意思の強そうな大きな瞳。大きな身振り手振りで、オレに対し怒りらしきものを訴えていたアリス。はねっかえりで強気なあの性格は、彼女の内部に組み込まれた人格プログラムによるものだ。人間のような、複雑怪奇な本物の感情、本物の意思ではなく、あくまでプログラム。プログラムによって彼女の性格は形作られ、形作られた性格に基づき、言動の決定が行われる。プログラム。あくまでもプログラム。プログラムは、書き換えられる。

「朝倉先生ですね？」

10日前、事前の連絡通りこの研究室を来訪した少女は、玄関ドアを背に優しい音色を響かせた。

「本日からお世話になります。アリストタイプ3200です。旦那

様からは、アリサという名前をいただいております」

柔らかな笑顔で、落ち着いた口調で、少女は丁寧にもオレに頭を下げた。どこか仄々とした、有態な言い回しだが、春の日に降り注ぐ陽光のような暖かな雰囲気、とても印象的だった。

日に5時間、計50時間をかけ、オレは「仕事」を済ませた。アリサが非常に協力的であったこともあり、作業は極めて円滑に進んだ。アリサの稼働状態について簡単なチェックとメンテナンスを行い、人格プログラムのバックアップを取得した。研究室に保存してあるニュートラルプログラムをコピーし、依頼主から事前に渡されていた要件書に従って、新しい人格プログラムを生成する。完成したものを、アリサにインストールしたのが今朝方。人格プログラムを書き換えられた姫君から飛び出たのが、先ほどの罵声と言う訳だ。

「調律師 朝倉冬冶工房」。この建物の外壁には、シンブルな明朝体で記された、そんな看板が取り付けられている。助手の類は問わず、「調律師」であるオレ一人で切り盛りしている、小さな工房と名づけてはいるが、コレは業界の慣習に従っただけのもので、内部は極めてメカニカルだ。旧時代的な代物とは違う。

「調律師」はアリサの発売と同時に誕生した、非常に新しい職業だ。アリサの開発プロジェクトに何らかの形で携わった技術者が独立開業しているケースが多く、オレもその経緯を辿った一人に数えられる。消費者はアリサを購入する際、その外貌と性格を数万種類のパターンの中から選択する。基本的に永続的に稼働するアリサは、購入者、いわゆるオーナーにとっても非常に長い時間を共に過ごすパートナーとなる。より自身の好みに合致したアリサを選択できるようにと考案されたシステムで、この販売形式がアリスヒットの原動力の一つとなったのは間違いない。ただ髪型、肌色、顔の造り、乳房のサイズ等、それぞれの組み合わせによる外貌の選択肢が無数に存在するのに対し、複雑な人格プログラムにより構成される性格は、そう多くのパターンを持たない。それ故に、最も好みに近い性格を選択したものの、もう少し従順であれば、もっと社交性を備え

ていれば、等、購入後にアリスの性格に関して大なり小なり不満や要望を感じるオーナーが、かなりの数存在するのだ。そこで、そういった要求に個別対応するのが、俺たち調律師の仕事となる。依頼者であるオーナーからアリスを預かり、事前に記載してもらった要件書に従って、希望通りの人格プログラムを作成、挿入することで、アリスの人格を強制的に改変する。この人格プログラム改変の一連の作業を「調律」と呼び、その効果の程は、朗らかで礼儀正しかったアリスの罵詈雑言が表す通りだ。

「さて……」

コーヒーを飲み干し一息ついたオレは、ソファから大仰に立ち上がる。カップをキッチンの洗浄機上に置くと、そのまま自室を出た。洗浄機の稼動する機械音が、ドアの向こうから控えめに響く。

研究室に戻ると、すぐにデスクに向かった。腰掛けたプレジデントチェアの背後から、アリスの寝息が微かに聞こえている。本当に眠っているわけでもないだろうに。無駄に凝ったアリスの造りに、思わず失笑めいた笑みがこぼれた。

オレを含む「調律師」は、アリスの行動論理等内部システムの専門家であり、アリスの全身を覆う人工皮膚やアンドロイドとしての素体の構成等の機械的部位については然程の知識を持っていない。仔細は分からないが、確か今アリスの立てている微かな呼吸音は、鼻腔の奥に装備されている超小型ファンの稼動音だったはずだ。アリスが今スリープ状態にあるのか、あるいは本当に故障して動作停止しているのかの区別をつけるために実装された機構であると聞いている。リアルな外貌や動作を追及するのは結構なことだが、単にスリープ状態の判別が目的であるならば、体のどこかに小型のランプでもつければ良いだろうにとも思う。

デスクに備え付けられた電子パネルを操作し、アリスの調律依頼書を表示させる。パネル上に専用のペンを滑らせ、依頼書右下に調律完了のサインを記した。表示を要件書に切り替え、同様にすべての要件を満たしている旨を示すチェックを入れていく。ペンに紙と

いった旧時代の遺物を使う機会はこの10年ほどでめっきりと減ったが、パネル上で滑らせる電子ペンとはいえ、たまに使うのは悪くない。ちなみに調律完了のサインを手書きで入力するのは、これもまた業界の慣習のようなものだ。

サインが終わった2つの書類を消し、表示をスケジュールに切り替えた。アリサのオーナーが彼女を迎えに来るのは明後日となっている。調律の作業は先ほどのサインですべて完了となるので、丸2日ほど暇ができたわけだ。軽く伸びをし、さて何をしようかと思案する。

調律を開始する際、たいていのアリスはオレの工房まで一人でやってくる。アリスの思考能力は人間でいうところの15歳程度。工房の場所さえ教えておけば、態々オーナーが付き添ってくる必要はないわけだ。余程距離があれば話は別かもしれないが、まあその場合は普通、もつと近くの工房を利用するだろう。実際アリスの調律工房はいたるところに存在する。調律開始時にアリスが単独で工房を訪れるのに対し、調律完了後の引き取りは、必ずオーナーが迎えに来るよう頼むようにしている。一言でいうならば、トラブル防止のためだ。調律の成果を工房ですぐ確認してもらい、必要であれば簡単な調整程度は無料で行う。アリサのオーナーは元村というよく肥えた中年の男で、成金趣味丸出しのやや気難しそうな、はつきりと言ってしまうえば面倒くさそうな人物だった。確認段階で何かしらの注文をつけてくる可能性はそれなりにありそうに思える。

「T3200、ReBootだ」

チエアをまわしてアリサに向き直り、やや大きめの声で呼びかける。微かな呼吸音が止まり、大きな瞳がゆっくりと開いた。

「その呼び方はやめろって言ってるでしょ。ヤブ医者」

すぐに身を起こし、瞼を半開きにしてねめつけてくる。予想通りの、順調な反応だ。

「医者じゃなくて、調律師だ」

先刻のやり取りをほぼ再現しながら、立ち上がってアリサの隣まで

移動した。ベッドの上で半身を起こしたアリサに向け、右手を差し伸べる。

「起きろ、でかけるぞ」

アリサの瞳が一瞬大きく開き、すぐに伏せられた。不機嫌そうに表情をゆがめ、オレの手から目を背ける。心なしか照れくさそうに見える。

「どうした？」

問いかけると、戸惑ったように一層に顔を背けてしまった。

「なんでもない。てゆうか、何よこの手……」

ボソボソと、呟くように言う。

「ReBoot直後だから、起き上がるのに手を貸してやるうかと思っただけだ。何か不愉快だったか？」

「別に……不愉快とかじゃ、ないけど……」

こちらに視線を合わせず、また口元で喋る。不毛なやりとりがわずらわしくなつて、アリサの右手首を掴むと、強引に立ち上がらせた。強く引かれバランスを崩した少女が、オレの胸に倒れこむ。鼓動を聞くかのごとく俺の心臓部に頬を寄せ、アリサは一層に表情を強張らせた。

「怒ったか……？」

少々乱暴に過ぎたかと思い、慎重に尋ねる。少女はゆるく首を振り否定の意を示すと、視線をそらしたまま俯いてしまった。

「ふむ……」

本来であれば理解に苦しむ反応ではあるが、この反応の根源的要因は把握している。言うまでもなく、オレが改修した人格プログラムの行動分岐に準じたものだ。青春ごっこにケリをつけるように赤茶けた髪を軽く撫でると、少女の肩をそつと押す。サイドテーブルを親指で指しながら告げた。

「そこに替えの服が置いてある。直ぐに出るからな。着替えてくれ」  
指差した先には、薄いブルーのワンピースが置かれている。丁寧にアイロンが掛けられ、畳み方には僅かほどの乱れもない。人格プロ

グラム改修前のアリサが、調律の折をみてやってくれた作業だ。本来の持ち主は以前この工房にいた別のアリス。要は忘れ物だが、取りに来ないので使わせてもらっている。

姫君は微動だにしない。いや、微かに頷いたか。俯いた少女の瞳に映っているのは、おそらく真っ白なりノリウムの床だけだろう。

「そこ」を正確に理解したか怪しいものだが、長く付き合っていても埒もない。背を向け、静かに研究室を出た。

「まったく……」

何度目かのため息が漏れ出る。随分と難儀な性格になったものだ。オーナーの元村の要望に従い人格プログラムを改修したが、なぜ高い金を払い、態々面倒な性格に変えるのかとうとうわからなかった。アリス本来の存在意義を生活をオールマイティにサポートするパートナーとするならば、10日前の素直なアリサの方が何倍も良いだろうに。

自室の戸を開け、歩きながら白衣を脱ぐ。壁のハンガーにそれを掛けながら、ふと、あの有難くない呼び名はコレのせいかと思に至る。安易な発想だが、まあいい。ならばもう医者ではない。

クローゼットから外出用の上着を取り出す。この5年ほど愛用している、ナチュラルカウのトラツカーだ。細身の体にはよく似合うと自負しているが、友人らからの評判は芳しくない。本皮が醸し出すやや野生的なイメージと、無表情と揶揄される顔立ちとのアンマッチが原因らしい。無表情、上等だ。ポーカーフェイスってヤツだろう。クールでいいじゃないか。

デスクから工房のカードキーを取り上げると、再び廊下に出た。さて、新しい服は姫殿下のお気に召しただろうか。研究室のドアを軽くノックし、声を掛ける。

「アリサ……」

「いま開けたら殺すっ」

言い切らぬうちに応答があった。さっきのだんまりはどこへやらだ。「玄関で待ってる。着替えたら来い」

一人玄関へ向かいながら、苦笑する。いま開けたら殺すとは大したものだ。オーナーと同状況に対峙しても、同じ台詞を吐くのだから。調律を行う際、オレ達調律師はアリスに対し、少々特殊な処理を施す。オーナーに対してと、実際に作業をする調律師に対して、対

象のアリスが同一の態度をとるよう仕向けるのだ。コレを行うか否かで、調律完了後の成果確認の難度が大きく変わってくる。

アリスは自身のメモリの中に、印象値と呼ばれる変数を保持している。自身が関わった人間、新しく存在情報を得た人間に対して、それぞれ個別に印象の良し悪し、インパクトの強弱を数値化して保有するのだ。印象値は0から10000までの整数で、この数値が大きいほど対象の人物に対して好意的な態度をとるようになる。0であるならば会うだけで顔をしかめるだろうし、逆に限界値の10000であるならば靴の裏ですら喜んで舐めるだろう。値は本人がそのアリスとどのように関わったかでリアルタイムに変動し、元の数値が両端、0もしくは10000に近い数値であればあるほど、一回の関わりにおける変動幅が小さくなる。オーナーはアリスを新規に購入する際、自身に対するこの印象値を任意に設定し、さらに数値低下に対するプロテクトを掛ける。このプロテクトにより、オーナーに対するアリスの印象値は低下することがなくなる。アリスが自身のオーナーを嫌ってしまうという状態を避けるためだ。便利なシステムではあるが、個人的にはあまり賛同する気になれない。極端な話最初に10000の印象値を設定してしまえば、例えばそのオーナーがアリスを毎日のように迫害しようとも、アリスは精一杯の愛情をその人物に注ぎ続けるのだから。

現在のアリスの元村に対する印象値は9570。オレに対する印象値も9570。元村に対する値は元来のものだが、オレに対するそれは、調律開始時に改変した言わば偽りの数字。アリスは印象値に基づいてその人物に対する態度を決定する。オーナーに対してと同一の態度を取らせる処理というのが、つまりこの改変を指すわけだ。ちなみに工房訪問時のアリスのオレに対する本来の印象値は6800。オレに対する好感の度合いが1.5倍になった結果、呼び名が朝倉先生からヤブ医者に代わるのだから素晴らしい。プログラム改修後のアリスの性格がいかに捻くれたものかが良くわかる。

玄関にかがみこみ靴紐を結んでいると、背後から乱暴な足音が聞



こえた。どうやらご到着らしい。さて姫君、新しいドレスはお気に召しましたでしょうか。

「ちよつと。何よこの服っ」

振り返るより先に焦ったような台詞が飛んできた。やはりそういう反応か。目を合わせるのは中止し、ことさら時間を掛けて靴紐を結ぶ。

「スースーするし、変なフリフリついてるし……。ていうかこっちは見なさいよっ」

キンキンと五月蠅い。仕方なく振り向くと、淡いブルーのワンピースに身を包んだアリスが仁王立ちしている。頬を僅かに染め、小さな両の手は胸元で握り締められている。「フリフリ」は、どうやら肩口のレースの装飾のことらしい。

「フリフリは知らんがな、スースーはしないだろ。そんな感覚を認知する機能はついていないはずだ」

「言ってみただけよっ。いちいち煩い」

一層に声が大きくなる。火に油を注いだらしい。だが改修結果を確認するには良い流れだ。少し好意的な意見を述べてやることにする。「だが何が不満なんだ？アリスに良く似合ってる。すごく可愛らしいじゃないか」

優しい口調を意識しはしたが、感想そのものに偽りはない。アリスは文句のつけようのない美少女だ。少々幼い印象はあるが、それだけにこの手の服は良く似合う。まあ容姿に優れているのは、大抵のアリスに共通して言えることでもあるが。

「どうした？」

ただでさえ大きな瞳をいっばいに見開いたまま、アリスは硬直している。下から瞳を覗き込むと、先程研究室でやってみせたのと同じように、視線をそらして俯いた。

「どうしても嫌なら着替えなおしてきてもいいぞ。まあその場合、さっきの服しか選択肢はないが」

多くのアリスは工房を訪れる際、着替えの類を持参しない。余程滞

在が長くなるなら別だが、精々が2、3週間の滞在なら、そういったものを必要としないのだ。アリスの体を覆う人工皮膚は見た目や触感こそ人間のそれと近似しているが、結局のところ人工物。発汗に代表される代謝現象は起こり得ないし、付着する菌や汚れの類も、ある程度のレベルまでではあるが、自動的に分解することができる。排泄はしないし、月経も迎えない。帯下等の分泌物とも無縁だ。つまりはそうそうに汚れることがないのだ。今回のアリサも例に漏れず、替えの服は持参してこなかった。さっきまで着せていたのはアリサにはあまりに大きすぎるオレの部屋着。本人が着てきた一張羅は、今朝方のスリープ解除時の大暴れで、姫君御自らオイルまみれにしている。

「さて、どうする？」

立ち上がって少し膝を折り、アリサに目の高さを合わせる。小さな唇が動いた。

「ほ、ほんとに、変じゃない……？」

予想通りの感情分岐。極めて順調だ。

「ああ。すごく可愛い」

言っていてやや気味が悪くもあるが、我慢しよう。次に彼女が口にする台詞は恐らく

「じゃあ……これで、いい」

思い浮かべた言葉と、少女の発した音声が綺麗にリンクする。調律の成果はやはり上々のようだ。

「よし」

まだ少しふわふわして見えるアリサに靴を履くよう促すと、玄関ドアを開け先に外に出る。開いたドアを靴で押さえアリサを待ちながら、何とは無しに空を見上げた。雲ひとつない青空が広がっている。これ以上ないくらいの快晴だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9026x/>

---

機巧アリスに口付けを

2011年10月25日00時46分発行